



Tsuchida Norihiko

つしま・のりひこ／一九五八年青森県生まれ。七七年青森県立五所川原高等学校卒業。八一年創価大学文学部英文学科卒業。八一年北海道の教員採用試験に合格し、中標津町立武佐小中学校に赴任。〇二年標津町立川北中学校教頭、〇六年より現職。一九九九年文部省(当時)教員海外派遣でドイツ・フランスの学校や教育機関を視察。〇三年標津町中学生海外派遣事業の団長として中学生を引率しカナダの学校やサケ・マス孵化場を視察し、現地の小中学生と交流。〇五年北方四島(フアミリー)訪問団の団長として北海道内各地の中高生約六〇名を引率し択捉島を訪問。住民と交流する。

教育の深さこそが、 社会の未来を決定づける

別海町立
中西別小学校教頭

對馬紀彦

さん 創価大学文学部卒業

對馬紀彦さんが教頭を務める中西別小学校は、全校児童三十六名。北海道の東端、知床半島と根室半島に挟まれた別海町にある。

別海町は、四国の香川県に匹敵する面積の土地に二万人の人びとと十二万頭の牛が暮らす酪農と漁業の町だ。町の海側にはラムサール条約登録湿地ともなっている野付風蓮道立自然公園の原野が広がり、内陸部には地平線が見渡せる広大な牧草地が続く。大自然と真つ正面から向かい合う環境だ。

「開拓者魂といいますが、この地域の人たちは、進取の気性に富んでいて、しかも団結心が強い。教育にも熱心で、地域全体で子どもを育てるといって、古き良き伝統が根強く残っています」と、對馬さんは語る。

對馬さんは、青森県に生まれ育ち、創価大学を卒業した昭和五十六年、北海道の教員採用試験に合格。これまで、中標津町や別海町など、根室管内の小・中学校で、四半世紀に及ぶ教員生活を送ってきた。



中西別小学校での授業風景

「地元での農協や役場などで教えるに、『對馬先生!』と声をかけられることが多くなりました。立派に成長して働いている姿を見ると、本当に教師になって良かったと思います」

教師になろうと思ったのは、中学二年のときだ。厳しいけれど、打てば響くように応えてく

創価大学は、これまでの教員採用試験で、のべ五千二百名を超す合格者を出し、子どもの幸せを願う教員を世に送り出してきました。創価大学ならではの「人間教育」を基盤とした教員養成プログラムは内外から高い評価を受けています。こうした伝統を踏まえ、二〇〇八年四月には、待望の「教職大学院」が開設されます。

れる英語の先生に会い、自分もそんな教師になりたいと思った。そして、当時、創価大学の現役生だった先輩の強い勧めで、同大に入学。母子家庭だったため、これ以上母親に負担をかけられないと、四年間、アルバイトと奨学金で学費と生活費をまかなった。創価大学には、苦労は買ってでもするという伝統がある。働きながら学ぶ生活も、つらいとは思

わなかった。「入学式で、創立者が『何事も人間が原点。知識を求めて求めて求めぬく四年間であってほしい』と話されたことが、今も強く心に残っています」

ある赴任校でこんなことがあった。その年、對馬さんが担任したクラスには、粗暴な振舞いをする生徒が何人かいた。生徒に誠実に向き合うことを信念とする對馬さんは、どんな生徒にも分け隔てなく接するように心がけた。やがて迎えた卒業式の日、先頭を切った對馬さんを胴上げしてくれたのは、そんな彼らだった。

「胸が一杯になりました。生徒の目線に立って、生徒とともに学ぼう。そんな気持ちが伝わった気がして、うれしかったですね」

都市部から遠く離れた地域での教育には、欲しい本がすぐ手に入らないなど、困難な面も多い。しかし、これまで自分を支えてくれた多くの人びとや社会の恩に報いたい、これからの子どもたちとともに成長していく教師でありたいと、對馬さんはいう。

「一生勉強です。成長です」

教育者には、高い専門性と同時に豊かな人間性が求められる。教育の深さこそが、社会の未来を決定づける——創価大学教職大学院のテーマは、そのまま對馬さんの目標でもある。

Soka Report | 創立者の軌跡 | 平和・文化・教育の世紀へ 12



創立者である池田SGI(創価学会インタナショナル)会長は、平和と人権のためにアールド・トインビー博士をはじめ、ゴルバチョフ大統領やサッチャー首相、ミッテラン大統領、胡锦涛主席、キッシンジャー國務長官、ノーベル賞受賞者のポーリング博士やマータイ博

士、作家のアンドレ・マルロウ氏、ローマクラブのベッチェイ博士などの識者との対話を半世紀以上も渡って続けている。1996年6月には、キューバのカストロ議長と会見(写真)。現在、創価大学では、国立ハバナ大学と交換留学などの交流を行っている。